

ほんばこ

愛媛県立今治西高等学校図書委員会 2020

今年の夏、皆さんはどのように過ごしていますか？新型コロナウイルス流行の影響で夏休みは短くなり、自分の時間が減ると思います。そのような時間の中で、少しでも読書に浸ってみませんか。

8月(葉月 はづき 秋風月 あきかぜづき 仲秋 ちゅうしゅう)

二十四節気

立秋 りっしゅう 7日

初めて秋の気配が現れてくる頃です。暦の上では秋になるが、実際には残暑が厳しく1年で一番暑い時期です。

処暑 しよしよ 23日

暑さが峠を越えて過し易くなり始める頃です。二百十日、二百二十日と並んで台風襲来の警戒日とされています。

『十二国記』 小野不由美 著 新潮社

「十二国記」、それは、我々の棲む世界とは異なる、地図上にない世界。この2つの世界は、「蝕」と呼ばれる現象によってのみ、行き来することができる。気候、慣習、政治体制などが異なるそれぞれの国を舞台に、懸命に生きる市井の民、政変に翻弄される王、理想に燃える官吏などが、丹念に綴られている壮大な物語。それぞれの国を舞台に繰り広げられる深遠な人間ドラマは、私たちに「生きる意味」と「信じる強さ」を問いかけてくれる。

(新潮社公式サイトを参照した 3年生女子)

令和2年度 第1回 図書委員会主催 図書館読書会 報告

- 1 日時・場所 令和2年7月16日(木) ⑧~本校図書館にて
- 2 テーマ ヘルマン・ヘッセ『マウルブロン神学校生』(新潮文庫、集団読書用テキスト) 1954年、ヘッセ77歳の小品。(マウルブロン神学校生徒アルフレートはヘッセ(先輩で中退者)に憧れていたがその後悲劇的な死を迎えた。彼のことを同級生のテーオドルがヘッセに伝えた。)
- 3 参加者 21名(1年7人、2年7人、3年7人) + 教師5名
- 4 意見交換 以下は主な発言内容
 - ・ヘッセに向いていない学校だった。
 - ・ヘッセたちのような苦しい生活をする勇気は私にはない。アルフレート(以下A)はヘッセを尊敬している。私も尊敬できる人を見つけて頑張りたい。
 - ・途中でAにとってつらい展開になった。Aはヘッセにそこまで入れ込めるのか。
 - ・Aが亡くなってからテーオドル(以下Tと表記)は若い頃の対応を反省した。神学校で神について学んだからか、人生経験を積んだからか。
 - ・Tはヘッセに夢中のAを馬鹿にしたがTがのちヘッセに手紙を書くことになるのは皮肉に感じた。Aは理想と現実のギャップで病んだ。
 - ・Aも若きヘッセもこの時代の犠牲者だ。人を抑圧する教育で国家の理想を押しつけている。『車輪の下』の校長も「少年の中の粗暴を打ち砕くべきだ」と言う。個性を生かす教育ではない。
 - ・AはTによって名前が残る言わば弔われた。ヘッセは少年期の自分を弔った。
 - ・Aが好奇心が強く尊敬するヘッセへの愛が強い。Aはヘッセの自由な生き方に憧れている。共感できる。
 - ・Aは孤独。誰にも理解されないと感じ悩む。ヘッセも同じように悩んでいたと共感した。ヘッセが悩んでいたのは自作の詩の自信がなかったのと、一度脱走して目をつけられていた。Aがヘッセに対し持った虚像とヘッセの実像は違う。Aは自信がある。
 - ・学校の机がヘッセのだったら嬉しいだろう。ヘッセがAの死後「こういう人がいた」と伝えるのはファンサービス。

- ・ Aはヘッセの名を机に見つけTに言ったが理解されず悩む。Tに言う前と後とで違う。
- ・ Aの作品は残っていないが「いつか作家に」とヘッセは書く。Aに共感している。ヘッセと『車輪の下』のハンスは、母がいるかどうかで結末が大きく分かれた。ハンスはハイルナーを失う。ヘッセは言い母親に恵まれた。Aは孤独でかわいそうだ。
- ・ ヘッセは親と喧嘩していたという話もあるよ。
- ・ Aもヘッセも「理解されない」と思っているが、天才故の繊細さがある。俗人とは見ているものに違いがある。神学校は個性を潰して均一にして立派な聖職者を育てる養成所のイメージがある。教えられる一般論は、Aやヘッセには厳しい。当たり前前のことは面白くないし、おかしいことを正しいかのように教えられても困る。結局変人呼ばわりされる。現代にも通じる。個性尊重と言いながら画一的な教育だ。画一的な宿題は個性を潰す。「宿題はなぜあるのか？」というテーマがある。麴町中の工藤校長先生は宿題を廃した。
- ・ 宿題があるのとないのと、どちらが効果があるか、対照実験をすると良い。テスト期間中は勉強するけど、それ以外の宿題は身につけていない。
- ・ いや、テスト期間中にも意味がない。写すだけの宿題がある。
- ・ ぼくは2年の後半から宿題を出していない。真剣に勉強していたら宿題をやる暇がない。が、本校では宿題がないとやれない人も多いため、模試で結果を出してから宿題批判をすると良い。・安岡章太郎の『宿題』を読んでみよう。元祖不登校のような人だ。
- ・ Aは学校でなくTにソッポを向かれたが、強い。周囲への興味が無い。自信があり、周囲を馬鹿にしている。ヘッセは学校・環境に不満があった。
- ・ いや、他人に興味が無いのでは無く、興味があつて、恨みや幻滅がある。・ヘッセへの熱狂的な愛情とあるが、多感な思春期で、空想癖があるだけで、小説の登場人物に感情移入はしているが、愛情とは言えないのでは。
- ・ Aにとってヘッセは先輩。ヘッセは画一的な教育に批判的。が、「個性尊重」は反面危険でもある。先生に負担もかかる。
- ・ 自由な校風はいいが、段々墮落するといけな。他方画一的なファシストの学校のようなのもよくない。「管理」は健康管理も含めてすべてダメか？
- ・ Aはヘッセと同じ机で嬉しい。その気持ちをTに伝えるがTの一言で一瞬ですべての人への不信感を持つ。
- ・ Aはそもそも孤独な人。『車輪の下』でも子どもたちの友情が続かない。周囲を馬鹿にしている。これは親や教師の考え方がそうだからだ。優秀な子は神学校というルートの固定化があり、その中で大切な物が見えなくなっている。・念のため。修道院付属の神学校がすべてこうだというわけではなからう。
- ・ ドイツの学校は当時と今で少し違う。10才でコースが分かれる。職人も尊敬されているとか。日本は戦前は複線型、戦後は単線型の六三三四制で、最近は中高一貫校なども出現。戦前の日本は、義務教育で教えることと、大学で研究することが、乖離していた。
- ・ ヘッセは何を伝えたかったのか？ 神学校を中退した自分を美化したい？ 学校や宗教制度への批判？ 実際のAやTの記録ではなく。もしかしたら全部ヘッセの創作？
- ・ Aとヘッセは似ていると思ったが… Aの空想癖は注目を浴びたかったから。変人を演じている。ヘッセに対する青年期特有の傾倒、思い込みがある？
- ・ Aは嫌われている。普通はそこで修正する。がAは修正しない。がTに対しては怒った。好きなものを否定されたら人は怒る。・Aは生き生きと好きなことに打ち込める。が共有する友人がいない。理解し合える人に出会っていれば（『山月記』の李徴のように）…

5 コメント ヘッセは神学校を中退するがその後ノーベル賞作家となった。若い人を思いやり励ます大作家となった。読んでみよう。参加者は本文を丁寧に読み、新潮文庫『車輪の下』および巻末の伝記なども読んでいた人が多かった。かつ学校や宿題のありかたについて真剣に考えていた。画一的な教育と宿題について議論が沸騰した。それぞれ思うところがあるようだ。時間があればもっと議論したかった。本日は諸行事の関係で夕刻の開催となったが多数の参加者を得た。コロナ対策もあり人数を絞って離れて座り窓も開放してマスクをつけたまま開催した。冬はフランスの小説を読みたい。（図書研修課）